



Case Study

# 5

## コミュニティガーデンからはじまる 多世代交流と生きがいづくり

Multi-Generational Exchanges and Lively Living Starting from the Community Garden

木村 吉夫

今宿コミュニティガーデン友の会 代表

### 1. はじめに

3年の準備期間を経て、今宿コミュニティガーデン友の会（以下、今コミ）が生まれたのは平成17年4月。横浜市都市計画マスターplanの一環として「旭区まちづくり」が平成14年から平成16年に作成され、当時の民間のメンバー数人が「文章よりも生きた顔の見えるまちづくり」と活動をしたことが始まりです。

コミュニティガーデンの理念は、放置された公園や、未利用地の荒れた公有地を再生し、市民の交流基地とすることです。今コミも600m<sup>2</sup>の手入れ不可の市有地を活用できないかとの申し出を受け、「顔の見える緑の市民交流基地」を目指して、酷暑の中、葛の根やガレキ、不法投棄の山と戦い、片付けに目途がついたのは8月のお盆でした。600m<sup>2</sup>の荒れてやせた土地に、私たちは「そばまき」をしました。「お盆過ぎから3ヶ月」を合言葉に、

9月には芽が出て、10月には白い600m<sup>2</sup>の花畠が誕生しました。近所の人からは「わあ、キレイ」、「懐かしい」といった歓声が上がりました。

ここから、「懐かしい」をキーワードに地域交流の「顔の見えるまちづくり」物語と、「生きがいづくり」の物語が始まったのです。



600m<sup>2</sup>のコミュニティガーデン。後ろの森は保存樹林地のため、無関係

## 2. 定番商品の誕生と生きがいづくり

今コミには、たくさんの定番商品があります。自立のための生き残りが生み出した“生きがいづくり商品”。その第一番が「そば打ち名人誕生」です。

メンバーの中にそば打ちに心得のある人がいて、「そば打ち道場」を開きました。メンバー相手→親子連れ相手→孫連れ相手とともに育ち、素人が玄人に変身しました。あちこちのそば打ち会や、小学校のそば育成の食育まで引き受け、交流の「わ」が外まで広がっていきました。

そのうち、堆肥のおかげで畑の土も肥え始め、ハーブや花が咲き、ラベンダーの香りが漂い始めました。ラベンダーは富良野ラベンダーを植え、花を乾燥させ、親子ワークショップ「ハート形の香り袋ラベンダー」の材料としました。この香り袋が定番商品2号として誕生します。これは、中心となる熱心な女性メンバーの生きがいと特技の賜物です。この、ハーブも定着し、ミント、カモミール、レモングラスがそろいました。そこで、ハーブティーを試みようと担い手を探したところ、特技を持った女性メンバーがいたのです。その女性を中心に勉強会が行われ、試作したハーブティーが評判になりました。イベントで来場者に試飲をしていただいたところ大好評。「ケーキが欲しい」という話から、ケーキ作りの名人が隠れた才能を発揮してくれました。ガス代も通常の1/3という省エネ、有機栽培材料の美味しい「エコケーキ」が誕生します。

話が広がり、地元の「今宿地区サマーフェスタ」の休憩室を担当してほしいという依頼が舞い込みました。ハーブティーとエコケーキの「エコ喫茶」が誕生です。熟年カフェを開業したばかりのメンバーにより、コーヒーもメニューに追加され、「ハーブティー、エコケーキ、ケーキのエコ喫茶」が第3の定番商品として評判になりました。この3つの定番商品で今コミの自主経済が回り始めます。

## 3. 今宿コミュニティガーデンの完成（ゾーニング）

600m<sup>2</sup>の土地の基本設計は、全員討論の結果「ゾーニング」という概念を取り入れました。芝生のイベントゾーン、ハーブゾーン、フラワーゾーン、学習体験ゾーン、果樹ゾーン、堆肥マスに分割。その理由は、600m<sup>2</sup>の荒地は水も電気もない、風の強い高圧線下の南斜面地なので、段差を作り、棚田のように造成する必要があったのです。人力のため、変更は簡単ではなく、検討に1年かかり、そこから造成に着手しました。段差には家の解体の廃材と、土木事務所の厚意で譲り受けた竹林伐採の竹を使い、斜面を4段に分けました。ゾーニングの完成後、芝生を植え、緑が誕生し、学習体験ゾーンでは子どもの声、イベントゾーンでは3世代交流の輪が広がりました。

ました。

一角に設置した堆肥マスでは、雑草の堆肥が始まり、有機栽培が回り始めます。次の定番商品が「土壤混合法」です。生ごみや雑草を土の中にいる好気性の微生物の力で土に変えるもので旭区役所が当時普及に力を入れ、今コミがその先陣を走りました。

今コミの芝生での最初のイベントは「ラベンダー畑で土づくり」です。ラベンダーの花を摘みながら、「土壤混合法」の実演をしました。こうして今コミは、ほぼ原初的完成期を迎え、成熟期に入ります。

## 4. 最大のイベント収穫祭

春には「エコ笑こまつり」、夏には「今宿サマーフェスタ」を開催していましたが、秋のイベントはありませんでした。そこで、秋にも何かをと考えた結果、「収穫祭」をやろうということに。11月23日勤労感謝の日を収穫祭と定め、第1回は「そば刈り」と「さつまいも掘り」で始まりました。このイベントは、当時、放課後に学童保育の帰りに必ず顔を出してくれる男の子と女の子がいて、その子たちの要望に応えたものです。人集めには、告知が必要なのでメンバー全員で3,000枚のチラシをポスティングしました。大変な労力ですが、それでも来てくださる方は20~30人でした。しかし、今では150人ほどの大イベントに育っています。イベントでは、焼き芋、子ども向けにはさつまいも掘り、里いも掘り、3世代交流向けに焼き芋と里いも煮を振る舞っています。

さらに平成26年度、横浜市と旭区共催で定年後の人たちに地域の担い手になってほしいと、4ヶ月間の育成講座「あさひみらい塾」が行われることになりました。今コミの収穫祭に焦点を当てスケジュールが組まれています。「あさひみらい塾」には、塾生の募集段階から6ヶ月間、全面協力をしました。これは、地元の人たちへの恩返しです。

## 5. 地域とのつながりと深化（進化）

もともと「顔の見えるまちづくり」をテーマに始めた今コミの活動ですが、イベント時の人の集め方や人数から、もっと深く地域にかかわりたいと考え、子ども会、老人会、町内会、地域ケアプラザ、地区センターとの連携を



あさひみらい塾見学風景

図り、各種イベントや催し物で協力し合い、次第にネットワークができあがりました。当初の3,000枚のポスティングが今では、子ども会、老人会、町内会の回覧、掲示板の掲示になり、チラシは300枚でポスティングはなくなりました。こうして、メンバーの負担も減り、地域との連携も深まつたのです。地域連携の例を紹介します。

①子ども会…小学校放課後学童保育と保育園の食育への協力、②老人会との共催による「よこはま看護専門学校」の「老年看護学」の今コミでの実習、③町内会との連携による生ごみのカラス対策、④緑のカーテンとゴーヤの食育の実習、⑤中途障がい者自立支援のための学習ゾーン活用、このように、3世代交流と同時にエコ情報発信基地としての役割を務め、3年前から旭区主催「緑のカーテン、ゴーヤの栽培」講座300人の講師も担当しています。



緑のカーテン用の支柱とネット張り作業

## 6. 生きがいづくり

今コミとしての方策についても触れたいと思います。

### ①入会動機「見える化」

今コミの活動は、四面フェンスに囲まれた「見える化」の見本です。イベントや活動に直接触れて入会する人、妻に背中を押されて入会する人、夫婦で入会する人などさまざまですが、長続きする人は“妻に背中を押されて”入会した人が多いです。これは、家庭平和に役立っているからでしょう。

### ②士気の高揚（マスコミへの露出）

人の役に立つ、達成感が得られる、特技が喜ばれる、病気の悩みが共有できる。また、活動がテレビや新聞に取り上げられるのも大きな励みになります。活動はできるだけ、ホームページで公開するようにしています。

### ③あなたが主役～マイプラン、マイガーデン～

何か新しいことをやる場合、提案者が主役です。写真の好きな人はホームページの写真や活動の記録ディスクを相手に贈る喜び、ホームページ担当の人はメールでの問い合わせを喜び、花の好きな人には自分のゾーンを割り当てます。自分のゾーンを割り当てられた人は、定例活動日以外でも花の機嫌（調子）を伺いにいっているほど。これをマイプラン・マイガーデンと呼んでいます。

### ④研修という名の娯楽

4月には定例総会と花見を、12月には臨時総会の名目

で次年度のマイプランづくりと忘年会・カラオケ大会、中間には研修旅行を行います。昨年は松田山ハーブガーデンを見学し、昼は大雄山最乗寺で精進料理を食べ、仕上げにアサヒビール工場見学をしました。研修という名前で結束と娯楽、食欲を満たします。



大雄山最乗寺への研修旅行

### ⑤問題点…高齢化

問題は高齢化です。メンバーも10歳年を取り、気は若いつもりでも体にはガタが来ます。定例日も作業半分、雑談半分で内容は健康、病気の話が中心。若返りについては努力中ですが、「あさひみらい塾」については、育成に全面協力し、塾の継続を支援していきます。

## 7. 今コミの「わ」

今コミの「わ」は活動理念としてメンバーや訪れる学生、大学の先生に説明する際、使っています。その輪が思わぬ広がりを見せることができます。

### ①ズーラシアの縁

平成21年第20回「みどりの愛護の集い」がズーラシアのサバンナ予定地で開かれました。その時、花壇づくりの人手として市から要請があり、80人（メンバー45人+知り合い）を出しました。その縁で開港150年博がズーラシアで行われた際、今コミもボランティア団体として1週間出展しました。平成29年には第33回全国都市緑化フェアが行われるそうなので、今から楽しみです。

### ②学生との縁…植物セラピー学

多くの大学生が卒論のテーマに、大学院や研究室がまちづくりの参考にと訪れます。その中で、農業系の大学生が「植物セラピー学」として今コミを取り上げてくれました。コミュニティガーデンに「セラピー」の効果があることを初めて知りました。

### ③支援者との「わ」

今コミは個人会員と賛助会員から成り立っています。特に賛助会員は年会費の他に資材、知識、ネットワークとたくさんの支援をいただいています。行政も区役所を中心に無形の支援をいただいております。こういった住民、行政、支援者の大きな輪の中でつながりが深化し、次の新しい輪のつながりを生んでいきます。